

2021年7月25日 礼拝説教要旨
 詩編講解説教70「神はためらわない」
 詩編70：2～6、ルカ1：46～55

詩編第70編は第40編14～18節とほとんど同じです。つまり繰り返しということです。150編の厳選された詩編が意味もなく繰り返すことがあるのでしょうか。その理由として、第70編の表題に「記念」(1節)とあります。この記念ということが繰り返すことの目的になっているのではないかと言われます。「記念」というのは、「想起させる、思い出させる」ということです。繰り返すことによって思い出させるのです。わたしたちは毎週教会に来て礼拝をまもりますが、説教についても、聖書の箇所は変わりますが、イエス・キリストの救いを繰り返し聞きます。また聖餐は「だからあなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです」(Iコリント11：26)と教えられます。説教を聞くごとに、そして聖餐にあずかるごとにわたしたちはキリストの救いを新たに思い起こすのです。「記念する、想起する」というのは追体験ということでもあります。思い起こしては、救いを新たにします。同じことを聞くのですが、その度に救いを新鮮に受け取るのです。

では、この詩編からわたしたちは何を想起するのでしょうか。その中心は6節です。「神よ、わたしは貧しく、身を屈めています。速やかにわたしを訪れてください。あなたはわたしの助け、わたしの逃れ場。主よ、遅れないでください」(6節)「貧しく」というのは、生きる力を失いつつあるという意味です。また「身を屈めています」は、社会的、経済的に弱い立場にあることです。具体的には理不尽な境遇にあって生きる力を失ってしまうことがあげられます。先日、娘から学校の課題のことで電話があった。人生の中で構造的暴力を受けたことがあるかという質問でした。特定の人からの暴力ではなく、社会的な圧政などを「構造的暴力」と言います。貧困や飢餓、国家による弾圧もそうでしょう。ミャンマーで起こっていることはまさに構造的暴力です。幸い今の時代、わたしたちの国においてはそういう構造的暴力は見える形では少ないと言えるでしょう。けれども決して無いとは言えない。「同調圧力」という言葉があります。世の中が画一的になることで生きづらさを感じている人は多いのです。かつて戦争の時代は、国家による弾圧を経験しました。特にキリスト者は当時辛い経験があったのです。イスラエルの歴史をみても捕囚によって人々はそういう状況に追い込まれておりました。異教の国々に支配され、礼拝の場所を奪われ、彼らはまさに生きる力を失い、身を屈めておりました。自分の力ではもはや立ち直ることができない。完全に破綻した状態です。それが他でもない罪に支配された状態です。わたしたちは罪ゆえに自力で立ち上がることができないほどに打ちのめされている。でもそのことに多くの人は気づいていません。

本当ならば一刻を争うような、そういう命の危機にあります。今日の詩編でも「速やかに」という言葉が繰り返されます。これは「すぐにも、急いで」という強い言葉です。早く来てください。助けてください。罪に支配されているということは、そういう状態なのです。長引く緊急事態宣言で「緊急事態」「非常事態」という言葉がとても軽くなってしまう。慣れが生じてくる。罪も同じで罪の中にあるのが常態化してしまうと、わたしたちはそれに危機感を感じなくなってしまう。慣れてしまう。だからこそ教会は繰り返し罪の悲惨を語る必要があります。もう限界にきている。生きる力を失いつつあること。だからこそ、詩人は言います。「神よ、わたしは貧しく身を屈めています。速やかにわたしを訪れてください」(6節)と。

この祈りは最終的にはイエス・キリストによって聞かれました。キリストにおいて神さまはこの地を訪れてくださった。貧しく、身を屈めているわたしたちと同じ場所に立ってくださいました。これは驚くべきことです。神さまが自らを捨てるようにして貧しくなられたのです。6節に「主よ、遅れないでください」とあります。「遅れる」というのは、原文では「ためらう」という意味の言葉です。ためらうから遅れるのです。躊躇して二の足を踏む。まことの神さまがまことの人となられるということは、まさに本来二の足を踏むようなことでしょう。でも神さまはためらうことなく、この罪の中に、あらゆる暴力で溢れる世の中を訪れてくださった。そして十字架とよみがえりによってこの罪の支配からわたしたちを救い出してくださいました。

今日のところとあわせてルカ福音書の伝えるマリアの賛歌を読みました。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです」(ルカ1：46～48) 神さまから顧みられること、マリアはそこに喜びを見出しています。誰からも気づいてもらえない、顧みられない人生ほど悲しいことはありません。でも神さまが貧しく身を屈めているわたしたちを顧みてくださるからこそ、わたしたちは生きることができるのです。そしてそのように神さまに顧みられた人は、誰かの痛みや苦しみに寄り添うことができます。教会はイエス・キリストを通して表された神さまの顧みの出来事を記念し、繰り返し聞き、聖餐にあずかることで罪の支配から立ち上がってきました。